

令和七年五月号

《第一四九号》

しるへび

宗教法人岩国白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

皇月の祭典・行事案内

【月次祭】 九時半より

十二日（月）

二十四日（土）

【総代会】 十時より

十七日（土）



第十五回神社総代会が五月十七日（土）に開催されます。任期をあと一年を残すばかりとなりました。ご出席のほどよろしく願ひいたします。

【昭和天皇御製】（第二四代）

古の文まなびつつ新しきのりをしりてぞ国はやすからむ

（昭和二十七年）

【岩国護国神社春季例祭】

四月十一日春季例祭が厳かに斎行されました。宮司と三名の祭員・典儀、そして二名の伶人が奉仕しました。総代長、吉川家、岩国市長の代理が、そして、海上自衛隊岩国基地軍司令、遺族代表等が参列拝礼しました。年々一般の参列が減少傾向にあり、岩国の守り神でもある三千三十三柱の御霊に感謝と祈りを捧げる大祭が市民から遠ざかつていくことが心配されます。

八月五日の「みたま祭」が今年は午前十時から変更されました。この機に、広く岩国市民に知らしめるべく様々な手だてを計画し、一人でも多くの市民の参列を促す必要が急務と考へます。

【推薦図書】

『皇室論』

なぜ天皇は男系でなければならないのか

竹内久美子著 方丈社

千七百円＋税

『今、日本が滅びようとしています。いや正確には、日本を滅ぼすための工作の数々が進行中です。2023年に慌ただしく、強引にも成立させられたLGBT理解増進法、移民政策、選択的夫婦別姓制度……いずれももつともらしい理由をつけながら、日本という国に對立をつくり、社会をバラバラにし、混乱のうちに滅亡させようとする意図があります。工作を施しているのは反日外国左翼勢力です。実は同じ勢力による工作は、皇室にも及んでいます。日本人の中には皇室を畏れ多い思い、皇室だけは神聖な場所。そんなところに工作が及ぶわけがないと考える人がいます。それは

真の日本人だから抱く感覚であり、反日外国左翼勢力には通用しません。実際、この数年というものの、マスコミ、ネットなどが総力を挙げ、秋篠宮家貶めのプロパガンダに狂奔しているではありませんか。……（まえがきより）

竹内久美子

なぜ天皇は男系でなければならないのか

女性天皇、女系天皇はNG、反日外国勢力の画策……、動物行動学研究者だから書ける本音のこと

皇室論

『価値観の侵略から日本の子どもを守る』

近藤倫子著 ハート出版

千五百円＋税

「……男性も女性も育児をしなければならぬ」と言われる時代ですが、日本の歴史を正しく『古事記』まで遡ると、男性も女性も分け隔てなく子育てを行っていた事実が分かります。子育てとは、ご飯を食べさせて体の成長を促すことや勉強のできる環境を用意することだけではありません。両親が共働きで忙しくても、短い時間で構いませんので、しっかりと子供の話の聴き、子供を大切に丁寧に扱い、心が落ち着く時間を確保して、子供に安心感と信頼感を与えることが本音の子育てであり、お母さんとの信頼関係を通して愛国心が育まれると

私は考えています。……」
（はじめに）より



「端午の節句は女子の節句だった？」
つい先日は桜花爛漫花々の輝くときでありましたが、今は「故郷やどちちらを見て山笑ふ」（正岡子規）新緑が目映好季節となりました。

拜殿には端午の節句を前にして御祭神をお慰めすべく、兜（かぶと）飾りを設置しました。掲揚塔にもご寄付頂いた鯉幟をあげ「青空の中に風吹く薄暑かな」（松瀬青々）の立夏の候を迎える頃となりました。

端午の節句の起源は江戸時代からで、菖蒲の節句とも云はれていました。菖蒲は薬草で邪気を祓ひ、火災をも除くといふ古くからの信仰もありました。また、農耕社会では五月は田植多月で、最も大切な時期でもありました。そこで、匂ひの強いよもぎや菖蒲を軒にさし、邪気を祓ひ、女だけが忌み籠もつて、祭りをしたさうです。よって、元は女子が始めた節句であつたのです。

本居宣長の

『直毘霊』を読む（二）

万の千秋の長秋に吾が御子の治るしめさむ國なりと、事依さし給へりしまにまに、天津日嗣高御座の、天地の共動かぬことは、既にここに定まりつ。

天雲の向か伏す限り、谷ぐくのさ渡る極み、皇御孫の命の大御食國と定まりて、天の下には荒ぶる神もなく、伏はぬ人もなく、

幾万づ代を経とも、誰しの奴か、大皇に背き奉らむ。あな可畏、御代御代の間に、たまたまも伏はぬ悪穢き奴もあれば、神代の古事のまにまに、大御稜威を輝かして、忽ちうち滅ぼし給ふものぞ。

【現代語訳】

多くの年月で長い年月に渡つて、私のご子孫がお治めになる、そのやうな国であると、委任なさつたのに任せて、神聖な天皇の位を意味する御座所が天地と共に動かないことは、既にこの点で定まつてしまった。天の雲が向かうに横たはる限界の地や、



ひきかえが移動していく極地までが、ご子孫である天皇がお治めになる御国と決まつて、世の中には乱暴に振る舞ふ神もなく、服従しない人もなく、
幾万の御代を経たとしても、誰といふ家来が天皇に叛逆申し上げるだらうか、そんなことはないだらう。ああ、恐れ多い、各天皇の御代御代の間にたまに服従しない悪い家来もあるのだ、その場合には、神代の古伝承のとほりに、天皇の御威光を光らせて、直ちに滅ぼしなされるものだ。

本居宣長（もとおりのりなが）の紹介
享保十五年（一七三〇）今の三重県松坂市に生まれ、享和元年（一八〇一）に歿する。

江戸時代後期の国学者で、職業は医師。
主な著書は、「古事記伝」「源氏物語玉の小櫛」「玉勝間」「うひ山ふみ」「秘本玉くしげ」「菅笠日記」などがある。

左は宣長六十一歳の時の自画像で、かの有名な左の和歌が添え書きされてある。

『志き嶋のやま登許、路を人登八、朝日尔、ほふ山佐久ら花』
（敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花）

（続く）

